

## 女流義太夫を正統化すること：

### 日本の伝統芸能におけるジェンダー、近代化、ナショナリズム

中村 美亜

近年、日本音楽研究において、女流義太夫が取り上げられることが増えてきた。本論は、筆者自身の行った女流義太夫の調査を、キミ・コールドレイクや水野悠子らによる、そうした最近の歴史研究の成果に照らし合わせながら、女流義太夫の評価が行われてきた文化的・イデオロギー的枠組みに関する考察を行う。特に、「正統性」が付与される過程に着目することで、現在の女流義太夫のあり方が、日本における西洋的近代化とナショナリズム、そして、それらと複雑に絡み合うジェンダーの問題と不可分であるということを指摘する。

女性の義太夫は、男性の「義太夫」に対して、「女流」という語により差異化される。二百年にも及ぶ長い歴史にもかかわらず、女流義太夫は、未だ文楽の舞台にのぼることが許されていない。「芝居は男のものだから」という彼女たちの口振りは、男性義太夫の特権的地位を受け入れ、彼らとは別の道を歩むことを目指しているかのようにも聞こえる。しかし、このことから、彼女たちが男女の不平等に対して無関心だと判断するのは、あまりにも早計である。女流義太夫は、「正統性」の獲得を通じて、自分たちの地位を向上させていこうと、むしろ、聡明に振る舞っているのである。

日本の伝統芸能において、正統であるか否かは死活問題である。義太夫として活動していくために、女流義太夫は、権威ある男性義太夫や、伝統芸能の保護政策を担う日本政府から「正統性」を与えられなければならない。しかし、ここで注目すべきなのは、この正統化のプロセスに、西洋的近代化の模倣と、その反動としての伝統的日本への固執が混在して現れることである。つまり、正統化には、大衆芸能から、より洗練された芸術へという女流義太夫の変質が要求される一方、伝統芸能保護というナショナリスティックな政策の中で、女流義太夫は、伝統的なジェンダー観を受け入れることが余儀なくされるのである。